

巻頭言

七月の雨

若築建設株式会社

代表取締役社長

烏田

克彦



七夕の前後、七月六日にふる雨を「洗車雨」と呼ぶそうである。洗車という現在の自動車を思い浮かべるが、なにせ織姫、牽牛（彦星）の時代、車とは牛車である。逢瀬の前日に牽牛が、乗っていく牛車を洗う。その水が天から降ってくるという。

このように日本語には雨をあらわす言葉がたくさんあり、一説には四百を超えるとのこと。日本人は太古より雨に親しみ、雨の恵みを受けて農作物を育て、日々を豊かに暮らしていたことがわかる。しかし最近よく出てくる雨となると、「大雨」、「集中豪雨」、「ゲリラ豪雨」など災害につながる危険な雨ばかりが思い浮かぶ。ここ数年で「線状降水帯」なる言葉もあたりまえになった。

実際、日本では雨量が増加傾向にあるようで、気象庁によれば、最近十年間のうち八年で、年平均降雨量が基準値より百ミリ程度多くなっている。また一九〇〇年以降の記録を調べると、日降水量が百ミリを超える大雨の日は増加傾向にあり、逆に降雨日数は減少している。数値データでも強い雨が増えていることが裏付けられている。地球温暖化との相関が証明されているわけではないが、これもひとつの気候変動であることは明らかに思われる。

気候変動対策の必要性は全世界で認識されるようになり、あらゆる活動に温室効果ガス（GHG）削減策が求められている。農林水産分野においても、スマート農業の推進、みどりの食料システム戦

略、農山漁村への再生エネルギー電力の導入など、GHG排出削減に向けた取組みや、防災・減災機能の維持向上など、気候変動による影響を緩和する取組みが進められている。

われわれ建設会社もその一翼を担うべく、土地改良事業における脱炭素と強靱化に貢献したいと考えている。最近の建設業界では、多くの会社が二〇五〇年のカーボンゼロを目標としており、多くの建設現場で、ICT施工による効率化、プレキャスト部材の採用、低炭素燃料の使用、太陽光など再生可能エネルギー電力の導入など、積極的な取組みを実施している。当社でも現場での対策に加え、昨年六月にTCFDへの賛同を表明し、営業拠点において水素自動車を導入するなど会社全体での対応も進めている。また社内にはサステナビリティ委員会を設置し、その中で気候変動によるリスクを分析するとともに、再エネ分野への注力など事業展開の方向性なども議論しているところである。

とはいえ建設現場は、農場や工場など集約的な施設と異なり、生産現場が離散的かつ短期的であるため、一社のみでの抜本的な対策は取りにくいのも確かである。原材料メーカーや建機メーカーなどと一体となった取組みを、スピード感をもって進めていきたい。

七夕当夜、七月七日の雨は「洒涙雨」というそうである。織姫の涙より、梅雨明けの天の川を見たいものである。